年報第3号の刊行によせて

辻　　功
(日本生涯教育学会副会長
筑　波　大　学)

年月は人の気付かぬうちにいつしか過ぎゆくもので，日本生涯教育学会は早くも年報第3号を世に送ることになった。

第3号は，学校教育の問題に焦点をあてて生涯教育の視点から学校を再検討しようとした。学校をどのように生涯教育の中に位置づけるべきかについては，生涯教育論議がさかんにたたかわされるようになった1960年代の後半から最重要な課題として認識されて来てはいるのであるが，理論化が非常に困難なために今日まで十分な検討がなされなかったといえよう。

生涯教育学会は発足当初から学校教育と生涯教育との関連についての論議を意識的に進め，研究大会や年報，さらには定例研究会等でその一部を発表して来たのであるが，今回この問題をいわば特集の形でとりあげ，多角的に考察を加えることにしたのである。

学校教育と生涯教育の問題といえば，当然，学社連携，学校開放がまず想起されるが，今回はこの連携や開放の問題ばかりでなく，学校教育システムそのものを生涯教育の観点から考察しようとした。それが生涯教育的学校論であり，また資格制度論的な考察である。生涯教育的学校論では内容，方法，評価，生活指導等かなり深く学校教育の個々の領域にふみこむことを試みた。また本書では，生涯教育計画の中の学校教育の実態を，或いは県レベル，或いは市町村レベルで検討を加えたが，さらに諸外国における同様の状況との比較分析，幼児教育との関連，リカレント教育との結合といった広い視野からの検討を加え，特色を出そうと努めた。

もちろん，学校教育と生涯教育との関係は上述のような側面の検討だけで解明しきれるものではない。本書で問題にした領域は相当広範なものであると多少の自負をもつのであるが，しかし，今後なお一層多角的に，かつ総合的に考察を加えなければならない。そのためには，本学会の会員はいうまでもなく，広くこの問題に関心をもたれている研究者，教育関係者の忌憚ない批判，叱正をいただかなければならない。しかし，これまで，意識されながらも，久しく本格的な論議がなされて来なかったこの問題についての研究討議が，第3号の刊行を契機として湧出するならば幸いである。

ところで，この学会機関誌には，全国各地で活躍されている方々の個別研究も発表されているが，いよいよ研究領域や研究対象が多様化して来ているように思われる。生涯教育の問題は，研究すればするほど多岐にわたるであろうことは予想されることである。

しかし，生涯教育研究は，その多岐にわたる研究が，互いに独立し，無関係のままに雲の彼方に消えてゆくようなものであってはならないと考える。そのためには，常に統合化をめざして研究者相互の連携を図ってゆく必要があろう。

幸いにも科研費などにより，学会メンバーの研究活動の連携を一層緊密化できる状況が現実に生み出されてきている。この機会を十分に活用して生涯教育の理論化，体系化を推進したいものである。

なお，年報第2号より生涯教育に関する各方面にわたる資料や文献を収集しているが本年報でも引続き，その後新たに発表されたものや発見されたものを収録した。生涯教育の研究者，実践者，行政関係者に広く利用していただけることを願うものである。

1982年10月